

# 田沢稲船

長谷川時雨

青空文庫



赤と黄と、ろくしやう 緑 青が、白を溶いた絵の具皿のなかで、流れあつて、虹にじのように見えたり、彩雲あやぐものように混じたりするのを、  
「あら、これ——」

絵の具皿を持っていた娘は呼んだ。

「山田美妙齋びみようさいの『蝴蝶こちよう』のようだわ。」

乙姫おとひめさんの竜たつの都からくる春の潮の、海洋わたつみの霞かすみが娘の目に  
来た。

山田美妙齋は、尾崎紅葉こうよう、川上眉山びざんたちと共に、硯友社けんゆうしゃを

創立したところの眉毛まゆげ美しいといわれた文人で、言文一致でものを書きはじめ『国民の友』へ掲載した「蝴蝶」は、いろいろの意味で評判が高かったのだ。

源平屋島の戦いに、御座船ござせんねをはじめ、兵船もその他も海に沈みはてたとき、やんごとなき御女性に仕えていた蝴蝶という若い女も、一たん海の底に沈んだが、思いがけず、なぎさに打上げられた。それは春の日のことで、霞める浦輪うらわには、寄せる白波のざわざわという音ばかり、磯の小貝は花のように光っている閑のどかさだった。見る人もなしと、思いがけなく生を得た蝴蝶は、全裸まはだかになつた——そのあたりを思いだしたので。

「あたし、小説を書こう。」

十七の娘、田沢錦子は、薬指ににじむ、五彩の色をじつと見ながら、自分にいった。

空はまつ青で、流れる水はふくらんでいる――

何処にか、雪消の匂いを残しながら、梅も、桜も、桃も、山

吹さえも咲き出して、蛙の声もきこえてくれば、一足外へ出れ

ば、野では雉子もケンケンと叫び、雲雀はせわしなくかけ廻つて

いるという、錦子が溶きかけている絵具皿のとけあつた色のよう  
な春が、五月まぢかい北の国の、蝶の舞い出る日だった。

むかしの、出羽の郡司の娘、小町の容色をひく錦子も、真つ白

な肌をもっている、しかも、十七の春であれば、薄もも色にお

つてくる血の色のうつくしさに、自分でも見とれることもあるのだった。その生々しさが湧きあがったとき、この娘は、

——なんて拙ますいんだろう。

と、自分の描く絵が模写にすぎないのを、腹立たしくなっていた。——この色は出やあしない。こんな、綺麗きれいな色は、ちつとも出やあしないじゃないか、残念だが——

彼女は、自分の腕に喰くいつくこともあった。と、そこにパツとにじみだして開いてくる命の花のはなやぎを、どんなふうにも色に出したら写せるかと、瞶みつめながらヒをなさげた。

ヒを投げたといえ、錦子はお医者さまの娘だ。徳川時代には、おヒといえ、御殿医であることがわかり、医者がヒを投げたと

いえば病人が助からぬということであるし、ヒを持つといえは内科医のことだった。これは漢法医が多く、漢薬は、きざんであったのを、盛りあわせて煎せんじるから、医者は薬箱をもたせ、薬箱には、柄えの永い、細長い平たいヒ——連れんぎよう翹はなびらの花片の小がたのかたちのをもっていたものだ。

錦子の家は出羽の西田川郡であったが、庄内米、酒田港と、物資の豊かな、鶴岡の市はずれではあり、明治廿年代で西洋医学をとり入れた医院だったから、文化の低い土地では、比較的新智識の家族で、名望もあつた。

——あたしの画はまずい。

と、思う下から、山田美妙斎の小説は、なんと素すばらしく、女の

肉体の豊富さを描きつくしているのだらうと、口惜しいほどだった。

錦子は、水に濡れ浸った蝴蝶の、光るような、なめらかな肌が、目の前にあるように、眼をよせて眺めていた。小説の中の蝴蝶も、自分の年とおなじ位だと思うと、彼女は自分の肌を、美妙齋に、描写されたように恥しかった。それは、いつぞや、自分のことを言つてやった文に、

——体に、脂あぶらがあると見えて、お風呂ふろにはいった時も、川で泳いだときも、水から出て見ると、水晶の玉のように、パラパラと水をはじいてしまつて——

そんなふうに、書いたこともあつた気もするのだ。



——ええ、泳ぎますとも、まっばだかで——とも書いたようだ。  
 ——田沢湖は秋田です。うつくしい郡司の娘が、恋人を慕<sup>した</sup>つて  
 身を投げたという湖は、それは先生、田沢という姓名からのお誤  
 りでしょう。田沢いなぶねは、ピンピンしています。此<sup>ここ</sup>処には、  
 近くでは、大岸の池というのがあります。あたくし、真<sup>ま</sup>つ白<sup>お</sup>な鵬<sup>とり</sup>  
 に乗った、あたくしの水<sup>みづ</sup>浴<sup>あみ</sup>の姿を描きたいのですが、駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>です  
 わ——

そんなふうにも書いたことがあつたようだったが——どうだろ  
 う、「蝴蝶」は、もつと前に出ているのだ——

錦子が、いくら<sup>つぶや</sup>呟<sup>つぶや</sup>いても仕方なかつた。彼はとうとう大きな溜<sup>た</sup>  
<sup>めいき</sup>息をした。

錦子は、絵の具皿の中から、白と紅べにとが解けあつたところを、指のさきに掬すくいとると、傍かたわらの絵絹えぎぬの上へ、くるりと、女の腰の輪かくを一息に丸く描いて、その次には、上の方へもつていつてポチリと点を打った盛り上もをおあがりいた。

その反対の方へむけて、腕の曲折を、ふつくらとつくと、それは、思いがけない生々しきで錦子の前へ、若い女が横たわつて、羞しゆう恥うちを含んでゐる——

「おお、蝴蝶どの、そなたの姿はわらわによう似ていられる——」  
歌舞伎役者のせりふもどきで錦子は、満足した自分の体も、そこへ、その通りの姿態ポーズで肘ひじを枕にして、ころがった。

——小説にしようか、絵の修業をしようか——まとまりようの

ない空想が、あとからあとから湧いてくる。つい、うっとりとしていると、

「あら、これ、何なの？」

妹がその絵を、見ているのは好いが、その後から母も来る様子なのに、錦子は慌てた。

「その、小説の口絵を、真似たのよ。」

そう言つて妹はごまかせても、母親の眼は恐い。絵の具が乾かないで、生々して見えるその尻の恰好は、娘の尻の肉つきそのままであることを母親は、一目で見破るであろう。乳首の出ぬ丸いさしぢちは？

——おお、まあ、なんてこの娘は、いやな——

と、呆あきれて、眼を反そむけながら角つのだ立てるに違ちがいはない。

いつも、いつも、お前はなんて早ま熟せているのだらうと呶つぶやく母親

には、見られなくなかったので、錦子は跳はねおきると、乳房おちちは朝あさが

おおにしてしまい、腰の丸味たらいは盥たらいにしてしまった。

錦子は、まったくまかせていた。売出しの小説作家、山田美妙齋に文通しだした。だが、小説「蝴蝶」の書かれたのは、二、三年前だが、近頃になって、「蝴蝶」の出でいた、『国民の友』の新年附録を、探し出して読みふけり、すっかり魅了され、心酔しつくしてしまった。そして、急に、グイグイ引き寄せられる気持ちになっっている。錦子が動かされたのも無理はないほど、美妙齋の「蝴蝶」は、発表された当ても世評が高かったのだ。そのころ仲

たがいをしていた尾崎紅葉さえ、宛名を、蝴蝶殿へとした公開状態で、

かくすべき雪の肌をあらはしてまことにどうも須磨の浦風と、一首ものしたように、それには挿絵に、渡辺省亭の日本の裸体が、類のないことだったので、アツといわせもしたのだつた。

河井醉茗氏の『山田美妙評伝』によると、美妙齋は東京神田柳町に生れ、十歳の時には芝の鳥森校から、巴小学校に移り、神童の称があつたという。十三歳に府立二中に入学したが、学科はそつちのけで、『太平記』や、『平家物語』をはじめ、江戸時代の草双紙の中では馬琴に私淑したとある。芝に生れた尾崎紅

葉とは、二中の時おなじ学校で、紅葉が三田英学校から大学予備門にはいると、二級の時に美妙齋が四級にはいり、旧交があたためられて、二人は文学で立とうという決心をあかし合い、しかも、芝からでは遠いというので、美妙齋の家は、学校に近い駿河台するがだいに引越して、紅葉も寄宿し、八畳の室へやに、二人が机を並べ、そのうちに、おなじ予備門の学生石橋思案いしばしあんも同居し、文壇ふうだんを風靡ふうびした硯友社けんゆうしゃはその三人に、丸岡九華きゅうか氏が加わって創立され、がらくたぶんこ『我楽多文庫』第一号が出たのは明治十八年五月二日だと考証こうしやうされている。

その石橋思案氏が、後に脳をわずらわれたが、稲舟いなぶね女史の話いしを私にしてくださいましたのだった。

錦子は自分のしたことがおかしくなつて、クツクツ忍び笑いを洩らしながら、

ひとり さける のぼら あわれ

あかぬ いろを たれか すてん

のぼら のぼら あかき のぼら――

と唄いかけた。この詩も、美妙の「野薔薇」というのの一節だったが、妹は、後に立つた母親に言った。

「姉さんて、妙な人ねえ。お琴を弾いても、唄わなくせに、ねえ。」

けれど、その妹が、敵は幾万ありとても、すべて烏合の勢なるぞ――という軍歌が、おなじ人が、早く作ったものだということ

は知らないでいた。

「錦子は、お父さんのお許しが出そうなので跳はずんでいるのだよ。」  
と、母は、錦子の室へやの中を見廻して言った。

「姉さんがいなくなると、さびしいねえ。」

錦子は、母親が現われたのでさつきからの、躍おどるような——火  
花が指のさきから散るような気持を、凝じっと堪えて、握りしめた手  
を胸におしつけていたが、思わず

「あら！ 東京へ行ける。」

と、感情の、顔に出るのを、さとられまいとしながら、せかせか  
言った。

「でもね、本当に、美術学校って、女も入学出来るのだろうかっ



て、お父さんは御心配なさってたが。」

「出来ないはずないでしょ。済さい生せい学舎（医学校）だって、早くから、女を入れたのでしょ。」

「そうらしいけれどね。」

母は、娘を、非凡な才智をもつものと見ている。それは、雪深い国では、何処どこにもちよつと見当らない、薰かおりの高い一輪の名花だった。

この娘を東京へ出して、思うままに修業をさせたら——それこそ小野の小町などは、明治の、才色兼備の娘に名誉を譲るだろう。そう思う母はは人びとの生れ育った時代は、幕末、明治と進歩進取の世に生れあわせていた。奥羽の各藩もさまざまの艱苦かんくの後、会津あいづ

生れの山川捨松すてまつは十二歳（後の東大総長山川健次郎男の妹、大山巖公いわおの夫人、徳富蘆花とくとみろかの小説「不如歸ほととぎす」では、浪子——本名信子さんといった女の後の母に当る人）、津田英語塾かしろの創立者津田梅子女史は九歳、その他、七、八人の、十七、八歳を頭にかしらにした一行と、海外へ留学した最初の人を出したりして、その後も、何やかと、幕末からつづいた、新旧の、女丈夫たちに刺戟しげきされて来ているので、東京では、もうすっかり急進欧化の反動期にはいつているときに、奥羽の隅すみの家庭人は、かえって、そのころになつて動いていた。

「あたしも、なるだけ、出してあげたいと、骨を折っているけれど——」

彼女は、娘の描いた、おとなしい絵を手にとって眺めて沈呻ちんしんした。

——この娘はもっと強い子だが——  
琴を弾ひかせても黙ひつて弾ひいている。あれは、あの時、胸のなかに、何か、物足らない思いが一ぱいに詰ひまっているのだ。この娘は、何も言わないが、どんなことを考えているか知れたものではないと、母親には、それが心配なのだ。

けれど、錦子が琴をかき鳴らしても唄うたわないのは、邪念があつたのではない。琴の糸いとの奏かなで出すあやは、彼女の空想を一ぱいにふくらませ、どの芽から摘とんでいいかわからない思いが湧わきあがるのだ。どう整理してよいか、まだ、そのわけが分はつ明つきとしないも

のが醜<sup>はつこう</sup>醇しかけてくるのだ。だから彼女は、うつとりとしたよ  
うな、不機嫌のような、押だまつたままでいるのだ。だがとうと  
う、錦子は、朝夕眺めた、鳥海山も羽黒山も後にして、出京する  
ことになった。

## 二

山田武太郎と表札の出ている、美妙齋<sup>すまい</sup>の住居を訪れた、みちの  
く少女<sup>おとめ</sup>のいなぶねは、田舎娘が来たのかと、気にもかけなかつた  
であろう美妙に、ハツと目を瞞<sup>みは</sup>らせた。

美妙は、たしか二十歳ごろから四、五年の間、女学生向きの

『いらつめ』という月刊雑誌を出したりして、若い女性たちとも顔をあわせることも多くあつたし、その時分も、浅草公園裏の薄茶の店の、石井おとめとの関係もあつたのだが、この小説家志願娘には心をひかれた。

——いなにはあらぬいなぶねの——

そんな句も、詩人美妙の胸には、ふと浮かんだかも知れない。

「稲舟いなぶねって好い名だな。錦子さんでも好いけれど、最上川もがみがわが

そばなのでしょう。みちのくというと、最上川だの、名取川だの、

衣ころもがわ川だの、北上川きたかみがわだのって、なつかしい川の名が多い。父

が、ずっと、あつちにいたからかも知れないが——」

美妙は、無口な娘を前にして、そんなことをいった。

美妙斎のお父さんは、維新前後奥州の方にいつていて、美妙の武太郎は明治元年の夏留守中に生れたのだった。その後、長野県の方にお父さんは警部をつとめていて、美妙は、やかましい祖母さんと、お母さんに育てられた、内気な、おとなしい息子むすこだった。父親が懐なつかしかった少年時を思出して、美妙は、あっちの方の川の名など数えたりして見た。

「絵はやめてしまうのですか？」

「ええ。」

「小説を書くとういうの？」

「ええ。」

十七でしたね、と訊きいてから美妙はおもしろい暗合を思い出し

ていた。

十七という年齢としは、才女に、なにか不思議なつながりを持つのか、中島湘しょうえん煙女史（自由党の箱入娘とよばれた岸田俊子としこ）も、十七歳のとき宮中へ召され、下田歌子女史しもだも、まだ平尾銆子せきこといった時分、十七で宮中官女に召され、歌子という名をたまわったのだ。そのほかにと考えながら、

「田辺龍子たなべたつこ（三宅龍子みやけ・雪嶺氏夫人せつれい）さんも十七位だったかな、小説を書きはじめたのは、そうだ、木村曙女史あけぼのも十七からだ。」  
と、日本の、明治の、巾幗きんかく小説家たちの、創世期時代の人々の名をあげたが、それは、そんな古いことではなかったから、錦子も、おぼろげながら知っていた。

「あたくしに、書けましようか。」

唐人髷とうじんまげの、艶つややかなのと、花櫛はなぐしばかりを見せているように、

うつむいてばかりいる娘は、その時顔をあげて、正面に美妙齋と眼を合わせた。

生際はえぎわの、クツキリした、白い額が、はずかしさに顔中赤味を

さしたので、うつくしく匂った。女らしさがすぎるほど、女らしい女だった。

肉付きの好い丸顔で——着物は何を着ていたかわからないが、彼女が次の年に「白薔薇しろばら」を書いたなかに、赤襟、唐人髷の美しいお嬢さまが、九段くだんの坂の上をもの思いつつ歩く姿を、人の目につく黄八丈きはちじょうの、一ツ小袖に藤色紋縮緬ちりめんの被布ひふをかさね——と



あるのは、尤も<sup>もつと</sup>当時の好みであつたから、それを応用しても間違いはなからう。唐人髷が大好きだつたことは友達が知つている。

美妙齋は二十七になつた美丈夫だ。白<sup>はく</sup>皙<sup>せき</sup>、黒髪、長身で、おとなしやかな坊ちゃん育ちも、彼の覇<sup>は</sup>氣<sup>き</sup>は、かなり自由に伸びて、雑誌『都<sup>みやこ</sup>の花』主幹として、日本橋区本町の金<sup>きん</sup>港<sup>こう</sup>堂<sup>どう</sup>書店から十分な月給をとつていたうえに、創作の収入も多かつた。

袴<sup>ゆき</sup>を、いくら伸して見ても、女の着物の仕立は、一尺七寸五、六分より袴は出ない。

大<sup>おお</sup>柄<sup>がら</sup>な娘というのではないが、錦子はシツクリした肉付きだ。丸い肩の上に、五分ほどつまんだ肩上げが、地方から出て来た娘

々して、何処か鄙ひなびているのを、美妙は、掘りたての、土の着いている竹の子のように、皮を剥むいていった下の、新鮮なものを感じていた。

立った姿も、思いがけなく、すんなりしているのに、この娘のアクをおとしたならば、素晴らしいと見た。

この娘が、無口でいて、体で、何か雄弁に語っているのに気がつくのと、紙へ書かせたならば、無口なだけに、案外大胆なことを書くのではないかと思つたのだろう。

「絵を習うよりは、君は、書いた方が好いいかも知れないね」と、力を入れてやっても好いいふうと言つた。

アクをおとしたならば、と美妙は錦子を見たが、そういう美妙

もアクのある好みの方だった。何かの好みが、紅葉とは違っていた。

それは、紅葉は町の子であつて、美妙は神田ツ子でも、警部さんの息子で、家庭が、京阪でいうモツサリしていたからでもあるが、大学予備門にいた、十九歳ごろから、小説で売出してからでも、長靴好きでよく穿はいていたということだ。

だがまた、それは、明治の初期から二十年ころまではそうしたふうがハイカラだったのだ。ハイカラ——高襟は、もつと、ずつと後日で生れた言葉だが、言い現あらわすのに都合が好いから借用する。芝居の、黙阿弥もくあみもので見てもわかるが、房ふつさりした散髪を一握り額にこぼして、シャツを着て長靴を穿はいているのが、文明開化

人だ。しかも、金<sup>カナキン</sup>巾のポツサリした兵児帯<sup>へこおび</sup>を締<sup>しめ</sup>て、ダラリと尻<sup>しり</sup>へ垂らしている。これも後には、白か紫の唐縮緬<sup>モスリン</sup>になり、哀れなほど腰の弱い安縮緬<sup>ちりめん</sup>や、羽二重絞<sup>はふたえ</sup>りの猫じやらしになったが、どんな本絞りの鹿<sup>か</sup>の子<sup>こ</sup>でも、ぐいと締る下町ツ子とは、何処か肌<sup>は</sup>合<sup>だあい</sup>が違っている。しかし、絞りをしめだしたのもずつとあとだ。とはいえ、年少にて名をなした、美妙斎<sup>えいち</sup>の額<sup>ぬか</sup>は、叡智<sup>えいち</sup>に輝いていた。

ことに、その時分は、紅葉、眉山、思案、九華と、硯友社創立時の友達たちを向うに廻して、金は這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>るが、「蝴蝶」を発表當時ほど言文一致派の気焔<sup>きえん</sup>は上らないで、西鶴<sup>さいかく</sup>研究派の方が、頭角を出して来たうえに、言文一致は、<sup>ふたばていしめい</sup>「二葉亭四迷」の「浮<sup>うき</sup>くさ」

の方が、山田より前だのあとだのと論あげつらわれたり、幸田露伴の「五重の塔」や「風流ふうりゆうぶつ仏」に、ぐつと前へ出られてしまつてはいたが、美妙齋の優やさおとこ男おとこに似合ぬ鬪志さかんなのが、錦子には誰よりも勝まさつたものに見えもすれば、スタイルも好きだった。

「先生。」

と、彼女は、離れともない思慕もまじえて、

「あたくし、一生懸命になります。当いま今どんな方たちが、女で、小説をお書きになつてらつしやいます。」

座蒲団ざぶとんの隅を折りながら、うつむきがちに、それでも、ハツキリと言つた。

「さあ！ 樋口一葉ひぐちいちようという人が、勉強しているというが——三み

宅龍子やけ、小金井喜美子こがねい、若松賤子しずこ——その人たちかな。あなたのように、書こうとしている女ひとはあるでしょうよ。」

「その方たち、どういう方なのでございます。」

「小金井喜美子さんは、森鷗外おうがいさんの妹さんです。」

「あ。あの『舞姫』をお書きになった、鷗外先生のこと？」

「小金井さんは、ふらんすの翻訳。若松賤子は英語もので、両方とも強しつかりしている。若松賤子は明治女学校の校長さんの夫人で、巖本嘉志子かしこというのが本名だ。」

美妙齋は眼を窓の外にやって、この娘を送ってやりながら散歩してもいい日だと思っている。

窓は八畳の室にあつて、八、九年前には、学生だった紅葉山人

が同居して、机を並べて、朝から晩まで文学談をやっていたということや、北向きだから冬は寒いということまで、窓をあけてお茶の水の土手を見渡しながら、美妙齋はへだてなく語った。

そんなに気の合った紅葉が、たった三、四日で、飯田町の祖父母の宅へ越していつてしまったのは、窓が北向きで、寒いばかりではなかった。長く、後家同様に暮している山田の母親と、その姑にあたる、とても口やかましい祖母とがいて、おとなしい孫息子を、引つかかえすぎるのに、煩さくなつて越したのだが、その事だけは、美妙齋はいわなかった。

神田川にそそぐお茶の水の堀割は、両岸の土手が高く、樹木が鬱蒼として、水戸家が聘した朱舜水が、小赤壁の名を

附したほど、茗溪めいけいは幽邃ゆうすいの地だった。

徳川幕府の士人の大学、昌平しょうへい黌こう聖堂の森は、まだ面影を残し、高等師範学校の塀へいは見えるが、かかったばかりのお茶の水橋は、細く、すつと、好い恰かつこう好だ。錦子も立つて眺めた。鶯うぐいすがささ鳴きをし、目白めじろが枝わたりをしている。人声もきこえぬ静かさで、何処どこからか謡うたいの鼓つづみの音がきこえてくる。

「君は、やっぱり一ツ橋の女子職業学校にしましたか？」

美妙斎は錦子を、傍におきたい欲望をもつて言った。

東京見物をするならばと誘われたが、錦子は、麴こうじ町まちの女学

校に、おなじ郷里から来ている友達が、外まで迎えに来てくれるはずだからと断った。



帰りがけに、書いて持って来ていた小説を、美妙の机の横において、目を通してくれといった。山田の門かどぐち口まで迎いに来ていたのは進藤孝子という仲のよい友達で、その女の生家も、鶴岡市の医者だった。

錦子と孝子が逢えば、話はいつも詩のことだった。孝子は新体詩を好んだので、美妙が、美しい詩ばかりでなく、「貧」というのでは、紙屑かみくず買いをうたっているといえ、錦子は、坑夫の詩もあるし、車夫の小説もあると負けずに言う。

この二人が文壇の見立みたちを探しだして、面白がって、くらべっこをした。

「りょううんかく凌雲閣登壇人（てんぐこつばむしや未来の天狗木葉武者）ってのがあるわ。浅

草公園、十二階のことでしょ。」

錦子が展ひろげると、孝子が首をのばして、

「エレベエタア休止中、螺旋階らせんにて登りし人——とあるわ。」  
と、読みだした。

「頂上十二階までが、春のや主人——坪内逍遙つぼうちしょうようよ。それから、

森鷗外、森田思軒しけん、依田学海よだがくかい、宮崎三味道人さんまいどうじん。」

「あたしにも読ましてよ。」

と錦子は引きとって、

「エレベエタアにて一分間に登りし人、頂上十二階まで紅葉山人、  
露伴子、美妙齋主人——いいわね。」

錦子は、苺いちごのような色の濡ぬれた唇で、

「十一階が二葉亭だわ。それと、漣山さざなみさんじん人。十階に広津ひろつりゆう柳浪ろうと江見水蔭えみすいいんよ。五階目通過中に川上眉山びざんじん人がいる。いい気味だわ。」

「どうして。」

と孝子は笑った。

「硯友社だからでしょ。」

「投書家って、よく何か知っているものね。ねえ、この凌雲閣の登りかたで、古い人のことも解るわねえ。」

それは錦子のいう通りだった。彼女たちが見ている十二階登壇人の続きには、

開業以前、建築中より登壇したる人というのに、末松すえまつせいひよう青萍、

福地桜痴おうち、矢野竜りゅうけい、末広鉄腸すえひろてつちようがある。

夫松さんは伊藤博文の愛あい婿せいで、若い時から非常な秀才と目されていた人だったという。明治十二、三年時分——もつと早くからかも知れない——演劇改良、国立劇場設立をとなえている。桜痴居士こじは、現今の歌舞伎座を創立し、九代目団十郎のために、いわゆる腹芸の新脚本を作り、その中で今でも諸方でやる「春雨はるさめ傘がさ」が、市川家十八番の「助六」をきかせて、蔵前くらまえの札差ふださし町人、大口屋ぎやうう暁雨きやうきの俠氣おとこだてと、男達釣鐘庄兵衛の鋭い気魄きはくを持って生れながら、身分ちがいの故に腹を切るといふ、その頃では、まだ濃厚に残っていた差別待遇を諷ふうした作を残している。

その芝居へ出てくる、葛城太夫かつらぎたゆうと、丁山ちやうざんという二人の遊

女が、吉原全盛期の、おなじ張はりと意気地いきじをたつとぶ女を出して、太夫と二枚目、品位と伝法でんぽうとの型を対立させて見せてくれた。そしてそれには丁度よく美しく品位ある中村歌右衛門や、故人の沢村源之助という、伝法肌でんぽうはだな打つつけの役者がいた。

末広鉄腸は、早く「溪間の姫百合」を出して、明治小説界の最も先駆者だが、その人たちは学者であり、政治家であり、社会人としても重きをなしていたから、十二階の高さにも、建築前に達していたというのであろう。

事務員に黒岩くろいわるい涙香なみこう小史がいる。『万朝報よろずちようほう』の建立者で、ユーゴーの「ミゼラブル」や、その他「モンテ・クリスト」をはじめ、沢山の翻訳があつて、ああしたものを、その頃の一般

大衆にも読ませてくれた恩人だった。

奥山閣から——花屋敷とよばれた中であつた、宇治の鳳凰堂ほうおうどうのような五層楼——凌雲閣を睨む人にらに正直正太夫しょうじきしょうだゆうの緑雨りよくう醒せい客きやくのあるのも面白い。

上野山から眺めている連中のなかには、不知庵主人内田魯庵ろあんがあり、漢詩の大家で、業病ごうびょうにかかり妹の曾恵子そえこを熱愛していた義弟勇三郎がその病の特効薬だときいて、他人の尻肉を斬きりとつたりしたのち、死刑になつた事件を引き起したりした、気の毒な野口寧斎ねいさいがある。

「ちよつと、ちよつと、これ見ない？ 見たくなければ見せない

」。

と、孝子が、ヒラヒラと見せびらかした一枚には「明治文学界八犬士」の見立みたてがある。滝沢馬琴ばきんの有名な作、八犬伝の八犬士の氣質風貌ふうぼうを、明治文壇第一期の人々に見立てたのだ。

「あら！ 犬江親兵衛が美妙齋よ。」

と、錦子はよろこんだ。親兵衛は一番若くつて、ピチピチしている人物だった。

その親兵衛が美妙で、色ならば緑、草木ならば豊後梅ぶんごうめだとあ  
る。

「豊後梅は、実が大きくつて、生で食べても、梅干にしてもおいしい。」

「そんな、自慢ばかりしていないで、他ほかのも読んでよ。」

と、孝子は笑った。

犬山道どうせつ節が森鷗外で、色は黒、花では紫苑しおん。犬飼いぬかい現げん八ぱちは

森田思軒で、紫に猿猴えんこう杉すぎ。犬塚いぬづか信乃しのが尾崎紅葉で緋色ひいろと芙蓉ふよう。

犬田小文吾こぶんごが幸田露伴、栗とカリン。大法師が坪内逍遙で白とタコ。

「緑は、すつきりしていて好いけれど——もうちつと。」

と錦子が色に不服をいうと、孝子が「花見立」というのから、

「桃よ、美妙齋は桃よ、紅葉は桜見立よ。」

と選えりだした。



錦子は出京してから、一ツ橋の学校にも近いので、神田さるがく猿楽ちよう町の親戚しんせきの家に泊っていた。

小さい家ではあつたが、黒塀の中から、深張りの洋傘こうもりをさしたりして、錦子が出てくると、附近には法律学校や医学校の書生が多かつたので、目をひいた。

駿河台するがだいの山田の家とはいくらも距離がなかつたから、自然と足近くなつていった。美妙は文学者の話をよくしてくれた。そのうちに、手を入れてやった錦子の小説を、発表してくれるとも言つた。

駿河台の東紅梅町には、ニコライ尼古来教会が落成して間もなかつた。

あんな高台へ、あんな高い建築を許して勿<sup>もつたい</sup>体なくも皇居のお屋根まで見えると、憤慨するものもあつたほど巍<sup>ぎぜん</sup>然とした、石の壁と、銅瓦<sup>がわら</sup>の、塔の屋根は尖<sup>とが</sup>つてゐるが円く、妙致を極めたものだった。

「昔だと、南蛮寺とでも、いつたのでしようね。これがニコライ寺さ。露<sup>ロシア</sup>西亞の国教です。日本へ伝道に來た坊さんの名をとつて呼んでるけれど、ほんとは、基<sup>キリスト</sup>督復活聖堂というのですと。」

と、広大な、寺院の廻りを、並んで歩きながら、美妙齋は、鐘楼の高さを、百二十五尺あるのだと語りながら、

「そういえば、あなたの髪の毛は赤いね。」

と、洗い髪をそのまま、チョンピンにして、白い大幅のリボンで、

額の上へ、大きな蝶のように結んで、紫の袴はかまを胸高むなたかに穿はいてい  
る錦子を凝じつと見て、

「稲舟なんていうより、君がそうしていると、この建築物によく  
似合っている。ほんとに好いい、ほんとに好いい。」  
と、すこし離れて、透すかして見るようにした。

「おかしな女ひとだ。日本鬻がみを結ゆうと黒い毛なのにね。」

「いいえ、赤っ毛なんですわ。」

錦子が、はずかしがって項垂うなだれると、頸くびすじから背中の生毛うぶげが金色  
に覗のぞかれた。

片翳かたかげりの、午後の街まちではあつたが、人つこ一人通らない閑静

さで、蜥蜴とかげが、チヨロチヨロと歩道を横ぎってゆくほどだった。

美妙斎はおさえきれないように、いたずらっぽく錦子の髪の毛をひっぱった。

見る見る、錦子の耳朶みみたぶが、葉鷄頭はげいとうのような鮮紅あかさの色になつて、からだ軀をギユツと縮め、いよいよ俯向うつむいてしまった。

と、片側の赤煉瓦れんがの、寮舎——ニコライ寺の学寮——の窓から、讚美歌が洩もれて来て、オルガンの合奏もきこえたので、美妙斎は錦子を抱かかえるようにして歩き出した。

そんなことがあつてから後だった。孝子に逢うと、錦子は、「嫌になつちまうわ。」

と眩つぶやいた。

「学校でね、跡見玉枝先生あとみぎよくしが、あたしの絵のことをね、あんま

り濃艶のうえんすぎるって仰おつしやるのよ。それだけなら好いけれど、ベ  
タベタしているって言うんですもの——」

「絵がなの？」

孝子が問いかえたことは、それは、女生徒の間にも、女教師  
たちの間にも、不言不語いわずかたらずに考えられていることなのだ。彼女が  
描く絵はとにかくとして、出京当時にくらべると、びつくりする  
ほど急に女づくつて、毎日々々綺麗になつてゆくのが、目に立つ  
のだった。

「あたし、種々いろいろなことを覚えようと思つてるのよ、山田先生に  
教えて頂いて——」

と、錦子はいった。

「ちよいと、文学者たちって、紅べにさまだの、美よしさまだのって、手紙に書いてたのね。あたし、紅より、っていう手紙見て、ちよいと怒ったことがあるの。そうしたら、紅葉さんですって。」

六月の日が照りはじめると、稗ひえまきや蒔屋や、風鈴屋や、金魚売、苗売ふしの声が、節面白く季節を町に触れ流してゆくようになった。

本郷台も駿河台も、すっかり青葉になって、お茶の水橋はまっさおな間に、細く白く見えるようになり、下ゆく水は、覗のぞかなければ見えなくなった。夜は、関せきぐち口の方ほたるから螢が飛んで来て、時ほととぎすととぎす鳥も鳴きすぎた。

その頃、どうかすると美妙が、じりじりしているのを、錦子は

見逃みのがさなかつた。小説は「萩はぎの花妻名誉の「一本ひともと」を發表しても  
らえることになっていた。

そうした日の、ある夕ぐれ、青葉の匂いを嗅かいで、そぞろ歩き  
をしようと、当然帰途は美妙齋におくつてもらうつもりで訪たずねる  
と、留守だつた。

賢かしこそうなお母さんが出て来て、まああがれ、まあ上れと進めた。

美妙齋がお母さん孝行なことは、話をしていてもわかるので、  
錦子もお母さんの進めに逆いらわなかつた。

「あなたは、他家へはお出いになられないのでしょね。御惣領ごそうりょう  
では——」

と、なんとなく、お嫁にゆかれるのかというような、口うらをひ

かれた。

「お宅は、お妹<sup>いも</sup>御<sup>ご</sup>さんおひとりですか？」

ともいった。

錦子は、美妙のお母さんのいう意味を、意識しながら、自分には優しくしてくれる祖母がいるので、大概な願いは叶<sup>かな</sup>うのだというように言った。

すると、継母ではないのかときかれたので、錦子はどきまぎした。そんなはずはないとうち消した。

「でもね、財産のあるお家の、家督を捨<sup>すて</sup>て、いくらあなたが物好きでも……」

と、お母さんは考えるように言うのだった。



錦子は、ふと、暗い気がした。美妙は好きで好きで堪らないが、このお母さんや、もつと強いおばあさんがいる、この家の者にはなりきれないと思うのだった。

そんなこと、自分だけの考えだと思っていれば、このお母さんも、何か、そんな事を考えているのだなと思えた。

それは、錦子が感じた通りだったのだが、お母さんの方は、息子も厭きらいでなさそうな娘で、丁度好よさそうだと思いが、この娘が自分に代つて炊事や、掃除そうじなどをするだろうかと考えるのだった。嫁は使いよい女中をかねなければならぬというのが、その人たちの女おんな庭訓なていであつたのだ。

錦子は、美妙は師の君でもよいが、もつと深い交渉も持ちた

かつた。だが、この家庭の嫁となることは躑躅ちゆうちよされた。彼女は美妙に愛されて——それよりもつと愛されたいものが芽ぐんである。それは、一度根ざしたら、その生涯であろう芸術の芽だった。

「ここいらあたりで身を固めさせたい。」

賢なる母親は、あんまり年若く名をなした息子の盛名が、昨今、すこしなまっているのです、なんとなく前途を危惧きぐしていた。地方の豪家と縁を結んでおけば——そんな下心がないともいわれなかつた。

「武太郎は孝行ですよ。言文一致とかで書きだした時も、まつさきにあたしに読んできかせましたのですよ。あたしが、そこが、

いけないといえばきつと直しました。」

おお、それは、と錦子は眼をパチパチさせた。これは大変、自分のものも、そんなふうに差図たまされては堪らないと案じた。だが、「先生は、ほんとに美しい、よいお声でございますわねえ。」と、長い袂たもとを、膝ひざの上に、乗せたりかえしたりして、どうして、暇いとまを告げようかとしていた。

「山形の方も寒いのでしょね、山田の父の出は、岩手なんぶ県の山田と申すところですよ。いいえ、あたしたちは知りませんけれど。」

美妙の母親は、江戸生れの者には、肌はだ合あいが違う重おもくなるしさを、仲たがいをして離れている夫からとおなじにこの娘からも受

取りながら、

「でも、あたしも医者の娘ですよ。」

と笑った。東洋のシエクスピヤというような、輝かしいあだ名のあつた天才を生んで、しかもその独り子が、色白で美しくつて、親孝行で、口答えもしないで、他家よその女の子より優しくしてくれる、めつたにない息子を持っただけに錦子が、ムンズリと押黙つてしまうと、うちとけて話かけたたくても、だんだん渋たくなくなる気がして、そう長くは引き止めなかつた。

それに、美妙がお酒好きで、飲みだすと帰りが遅くなるし女遊びをする様子も知っているだけに、

「何処どこへ寄りましたかねえ。あの人は、種いろんなことを考えている

ので、お友達のところへ行くと長いから。」  
と、錦子に、帰るしおを与えた。

錦子は、青葉の中を、美妙と、そぞろ歩きしようという、あて当が  
はず外れただけでは無い重つくるしさを抱えてほっくりを引きずつて  
歩いた。

美妙斎の、特長のある長い顎あごも、西欧の詩人や学者のように、  
耳あたりの辺で、房ふっさり髪を縮らせた魅惑も、逢わない時はことさら  
に強く思いうかべられて、こういう時には、ああいう眼をする。  
ああした時には、額あごよりも顎の方が光ると、チラチラと眼にうか  
ぶのだが——あの人は好きで好きでならないが、あそこ彼家のお嫁さん  
にと考えると、気が進まないのだった。

それに、樋口一葉が、好い小説を書出したので、自分ももつと勉強しなければいけないと思つて、意地わるく、しつこく思いだしたりした。美妙に逢つていると、励まされるのでそんなに屈託しなかつたが――

「樋口夏子は苦勞しているもの。だからつて、あなたが、求めて、あの女とおんなじ苦勞をしなくつても好い。あなたは、あなたのものが生れてくるさ。それに、僕がこんなに大事にしていれば、一葉は、かえつて田沢錦子をうらやむかもしれない、いや、僕を好きなのではないが、あの女にも、恋はあろうさ。」

そんなようにもいわれた。一葉は、あの細っこい体で、一文菓<sup>いちもん</sup>子の仕入れにも行くのだそうだが、客好きで、眉山<sup>びざん</sup>などから聞く

と不断ふだんは無口だが、文学談になると姐御あねごのようになる。そうすると、青い顔の頬ほおの上が真赤になつて、顔が綺麗になるということだ。浅草の、大音寺前だいおんじまえという吉原に近いところで荒物店あらかものやを出すとかいうから、そのうちに吉原を素見ひやかしながら、あの辺を通つて見ようといつたりして、

「そんな生計みすぎも、書くための、命をささえる代しろなのだろう。」  
と、それは、思いやりのある暗い眼つきをしたが——ああ、やつぱり、競くらべものにはならないのだ。好い気になつて、のんきな気持ちで聴いていたが——

(じゃあ、あたしは、何を目的に、一生懸命になつたら好いのだ  
)

自問自答すると、（恋愛）という答えしか出なかった。そしてまた、その目標は美妙齋だと思わないわけにはいかなかった。

錦子がじんぼうちょう神保町へおりてくると、広い間口をもった宿屋の表

二階一ぱいに、書生たちが重なって町を見おろしていた。この附近は下宿屋がかどなみ門並といつていいほどあつて、手すりにてぬぐい手拭がどつさりぶらさがつていたり、寝具を干してある時もあるが、夕方などは、書生の顔が鈴なりになつてゐるのだった。

書生たちが見おろしてゐたのは、ヨカヨカ飴屋あめやが来ているからだったが、飴屋は、錦子を見ると調子づいた。

ヨカヨカ飴屋は二、三人連づれで、一人が唄うたうと二人が囁はやした。手拭で鉢巻きをした頭の上へ、大きな盥たらいのようなものを乗せて、太



鼓を叩たたいているが、畳つきの下駄を穿はいた、キザな着物あずまを東からげにして、題目太鼓の柄にメリンスの赤いのや青いきれを、ふんだんに飾りにしている、ドギツイ、田舎いなかつぽいものだった。

ドドンガ、ドドンガと太鼓を打って、サイコドンドン、サイコドンドンと囃はやした。錦子を通ると錦子に呼びかけるように、

——お竹さんもおいで、お松さんも椎しい茸たけさんも姐ねえちゃんも寄つといで。といやらしく言つて、

——恋の痴話ちわぶみ文ナ、鼠ねずみにひかれ猫をたのんで取りにやる。ズイとこきや——と一人が唄うと、サイコドンドン、サイコドンドンとやかましく囃はやしたてた。

二階から書生どもはワツと笑いたてた。

錦子はカツとして、どんどん寄宿している叔父の家へ帰つてくると、一層不機嫌になつていた。孝子のところから手紙が来ているといわれても、ちつとも嬉しくなかつた。

それでも手紙は気になつた。急いであけて見ると、

——先<sup>せん</sup>達<sup>だつ</sup>ての「見立」の続きをお知らせいたします。あなた

の好きな方のお名もありますから、早くお知らせいたしたく、お目にかかるまでとつておけないので手紙にしました。お礼をおつしやい。

「文壇女性見立」

女教師 鷗外、芸妓 紅葉、女生徒 漣、女壮士 正太夫、権妻  
 美妙、女役者 水蔭、比丘尼 露伴、後室 逍遙、踊の師匠 眉

山、町家の女房柳浪。

それからね、衆議院議員見立には、山田美妙斎は改進黨の島田しやべ郎（三郎）よ。偉いのは田辺竜子と小金井貴美子と、若松賤子の三人が、女でも、その仲間にはいつていました。

「当世作者忠臣蔵見立」というのでは、

由良之助ゆらのすけが春のや（逍遙）で、若狭之助わかさのすけが鷗外で、かおよ御前ごぜん

が柳浪、勘平かんぺいが紅葉で、美妙はおかるよ。力弥りきやが漣山さざなみ人なの。

定九郎さだくろうが正太夫なのは好いわね。

錦子は、おかるが美妙というところで、クスンと鼻で笑ったが、嬉しくなくはないが、なんとなく浮きたたなかつた。

その晩の出来ごとで、もひとつ錦子を悲しませたことが出来た。

二、三年前から女の髪剪りがはやっていたが、最初は、黒い歯の鋭い虫が噛みきるのだといつて下町の女たちは、極度に恐れて、呪文を書いた紙をしごいて、髪に結びつけたりしていたが、そのうちに、なんでもそれは、通り魔のようなもので、知らないうちに鬚を切られたり、顔を斬られたりするのだといった。

美しい娘で、外に立っていたらば、突然、痛いと思うと、頬ぺたから血がにじみだしたというようなことは、眼につきやすい女に多かつた。

錦子が、朝目ぎめて見ると、唐人鬚がころりと転がりおちた。

ハツと唇の色を変えて、錦子は顫えあがつたが、いたずらものが忍び込んだ形跡もないので家の者たちは神業だと、禍のせい

にした。他分、表で斬られたのを、枕につくまで落ちずについていたのであつたらう。だが錦子は、いやあな予感がしたのだった。

七面鳥の錦嬢きんじょうという名を、近所の書生たちからつけられたのは、唐人鬘を切られてからだだった。

短かい髪を二ツに割わけて、三ツ編あみのお下げにし、華やかな洋装となつた錦子の学校通いは、神田、本郷の書生さんたちの血を沸騰させた。美妙齋の食指のムズムズしないわけではない。

——今日錦嬢と——

という文字は、美妙齋の日記二十四年の末からはじまっている。

二十五年にいたつては、ますます頻ひんぱん繁だ。

ある時は、上野摺鉢山——あの、昼も小暗く大樹の鬱蒼と  
すりばちやま おぐら うつそう  
 していた、首くくりのよくある場所——上野公園のなかでも、と  
 くに摺鉢山。ある時は九段——これも、日中あまり人通りがな  
 った場所だ。ある時は根津ねづの旗亭きていでの食事。

ここで、ひとこと一言筆者が申したいのは現今、どなたの稲舟いなぶね研究  
 にも、十九で死んだことになっているが、わたしは二十三歳と信  
 じていた。ずっと前に書いた小伝にも根拠があつて二十三と書い  
 たのだが、この稿をはじめの時、あまり他の年譜を信じすぎて、  
 自分の思いあやまりかと諸説にしたがい、末年を十九にとつたた  
 めに、年に無理が出来て来た。で、美妙が錦子の肩上げを見た  
 ころは十七であつたが十八にしていただけだ。もつとも、錦子

の生れた地方も、他の、みちのくの国々とおなじに、丸年まるどしで――満幾歳で数えていたとすれば、こじつけられないこともない。

写真も古い『文芸倶楽部』に出ていたのは、何処やら野暮くさいが、二十三の春にうつした婚礼の丸鬚のは、聡明で、しとやかで、柔らかかみがあり、品のある顔と、しなやかな姿だった。

さて、傍見わきみをしないで、急ぎましょう。

十九になった錦子は、小暗い木蔭の道路での、美妙齋ひじの肘の小突き工合や、指の握りかた、その他のあしらいの荒っぽさや、丁寧さが、女の心を掴むのに、活殺自在であることを、なんとなく感知した。

側わきにいても、身が縮まるような悦びは、それはもう、とうに過

ぎさつた日となった。今は、美妙が接する女は、自分ばかりでないのを知って悲しかった。

——あたしはこんなことを仕しに来たのではない。

そんなふうには、冷たく自分を叱ることもある。

——こんなことで、一葉に負けない小説が書けるか——

悦びといまいましたと、切なさだが、幻燈の花輪車かりんしゃのように、

赤く黄色く青く、くるくると廻る——そんな時に、国許もとへ帰れと呼びかえされた。

「お父さんが、あんなに、お前の、書いたり読んだりするのを嫌がって、厳しくなされたのを、学校を勉強するからと出してあげたのだ。」



それがまあ、とんでもない女になつて——と、可愛がつた祖母までが怒つていゝという。

七面鳥とは、派手に美しい錦子の洋服姿であり、昨日の優美な娘風と、一夜に變つたスタイルを、書生たちは言いいあらわ現したのであろうが、錦子は、たしかにその頃から、沈んだり、はしやいだりすることが多くなつた。

「あたし、郷里くにへ帰らなきやならないのよ。だけど、いいわ。あつちにおいて、思いつきり勉強するの、好いもの書くわ。」

そう言つて泣かれた友達は、それも好いかも知れないと慰めて、「なにしろ、あんまりあなた、美妙齋が好きすぎるもの。『いらつ女め』ひとに書いてる女にも何かあるんだつて？ 困るわねえ、浅草

にもだつてね。」

自分の好きな男は、他女ひとも好きなのだ——そんなふう簡単に錦子に考えられたらうか？

錦子はこんなふうにも思うこともある。阿古屋あこやひめ姫とは誰だろう——そもじは阿古屋の具にもまさった宝と、何かに書いてあつたが誰だろう。あたしかしら？

——甘いささやき——

銀蜂ぎんばちがブンブン言っているのでも、郷里くにへ帰つた錦子は、ものごとが手につかなかつた。

だが、ふと、美妙の手許にあつた、薄すべつたい、青黒い表紙の雑記帳を、一ひらめくつて見た、厭いやな思い出もおもいださない

ことはない。表紙うらに鉛筆のはしり書きで、

奈まじい<sup>な</sup>にあひ見る事のつれなきに

さりともあはで返されもせず

廿四年十一月六日作とあつた。あれが、わたしへの、ほんとの  
美妙の心ではないかとも思い、いえ、そんなことは決してないは  
ずだとも打消した。

しかし、どうも、それは、はずでばかりはなかつたようだ。人  
の心は微妙であるから、なんとも他<sup>ほか</sup>からはつきりは定め<sup>き</sup>られない  
が、美妙齋はそのころから関係のあつた、浅草公園の女、石井留<sup>と</sup>  
め<sup>めじよ</sup>を、九月<sup>じんじつ</sup>尽日に落籍<sup>らくせき</sup>して、その祝賀を、その、おなじ雑  
記帳へも書いているのだ。

この女の人を、後のちにおつぽりだしたので、『万朝報』でたたか  
れて、美妙斎は失脚の第一歩を踏んだのだったが、留女を落籍し  
た日は暴風の日であつて、一いち直ちなおから料理をとつて祝つた。茶碗  
もりや、鯛たいの頭かしら付きの焼もので、赤の飯で囃はやしたてたのだ。そ  
の後、この女のところへであろうが、別荘、別荘、と別荘行きを  
毎夜記しるしつけてある。もとより、錦嬢とあつてることも、その他  
の女とのこともある。

これは、稲舟にも入用なことだ。稲舟の田沢錦子は、今日まで  
の記録では、不良少女のようにいわれているけれど、そうした留  
女のような莫ばく連れん女おんなと同棲したからこそ美妙は、錦子のモダン  
な性格が一層慕したわしかったのかも知れない。

錦子はまた出京した。そしてまた帰った。どうしても郷里くにに凝じつとしていられない気持ち——無論美妙齋からの手紙もある。それよりも彼女が出たいのだ。

錦子がそうしているうちに、郷里で、彼女を恋いしたうものが出来た。それに、東京に来てから、墨田川へ身を投げようとしたような、発作ほつきを起したこともあった。

錦子に思いを寄せた郷里の男のことは、いなぶねの死後に出た秘書——美しい水茎みずくきのあとで、改良半紙に書かれた「鏡花録」によって僅わずの人が知っているだけだ。墨田川投身も、知ってるものはすけない。

その間に書いたものが、稲舟の文壇初舞台デビューといってもよい小説

「医学終業」だ。

だが、錦子が煩悶はんもんに煩悶した三、四年の間を、美妙と留女との歡樂はつづいて、前川——浅草花川戸うなぎぎの鰻屋——に行き、亀井戸の藤から本所ほんじよ四ツ目の植文うえぶんの牡丹見物ぼたんとしやれ、万梅まんばい——浅草公園伝法院でんぼういんわきの一流割烹店かつぼうてん——で食事をし、歌舞伎座見物の帰りは、銀座で今いまひろの鶏とりをたべるといったふうだった。美妙という人が、どんな生活をしていたかということが、稲舟はどうして死んだか、ということと、裕あわせの裏表になるのだが、紙数をとるから、そんな事ばかりは書いていられない。塩田良平氏が美妙の日記を研究発表されるということであるから、やがて世に知れるであろう。

とはいえ、世の中は悲しくも面白いものだ。その二十六年には、十二階に百美人の写真が出たのだ。あの、市村羽左衛門いちむらうざえもんとの情話で名高い、新橋の洗い髪のお妻が、髪結かみゆいせん銭もなく、仕方なしに、髪をあらったままで写した写真が百美人一等当選とめだったのを、美妙が六銭の入場料をはらって見て、そしてお留とめのところへいつている。

#### 四

近いうちに、どうしても東京へも一度行くという音信が、孝子のところへ、錦子から届いた。

郷里くにの実家に、落附こうとすればするほどあたしはジリジリしてくる。どうして好いのか、笑って見たり、怒って見たり、瘡かんし癩やくをおこしてばかりいる。

あたしは、こんな事をしていて好いのかと、自分の胸を搔かきむしつてゐる。郷里いなかへ帰つたからつて、好いものは書けやしない。やツぱりあたしは、美せい妙せいのそばにいなければいけないのだ。

あなたは、美妙の評判がよくないと仰しやるが、それは、あの人を女が好くので妬ねたまれるのです。それにこのごろ、紅葉の方が小説を多く書いて、美妙が休みがちなので、そんな噂うわさをするのでしよう。

実は、美妙からも出て来ないかといつて下さるから、あたしは



どうしても出京します。

——そんなふうな手紙が幾度か繰返されてくるうちに、ある日、錦子は、孝子の前へ笑つて立つた。

「いけない娘になつてしまつて——自分でも、我儘だと思つてくれど、なんだかジリジリして。」

と、謝るあやまるように孝子を見る眼に、矯きよう羞しゆうをうかべた。

「あなたを、大層思つていた人が郷里に、あつたというではないの。」

「あんなの、なんでもないのでよ。種いろいろ々なことという人随分あつたけれど、戯じようだん談だん半分なのよ。」

と、錦子は友達の真面目まじめなのを、ごまかしてしまおうとした。

「でも、その人は、結婚を申込んだというのじゃないの。お父さんもお母さんも、御承知なのでしょ。」

「でも、どうとでも、お前の心のままにしろというから、否いやだといつたの。だから、それは何でもないのでよ。もともと友達とものつもりだったのだから。」

そうはいつたが錦子も、その男が、青くなったり、赤くなったりして涙ぐんだのを思い出すと気がめもするのだった。

「あたし、一生独立しようとして心に誓って、はじめは、医者になろうかと思つたのですけれど、それもだめだったし、画師えしになろうかとも思つたのですけれど、それも駄目。やっぱり、もともと好きな文学でと思つてるのです。けれど、それも下手へたの横好きと

いうんでしょ。自分ながら才がないので、気をもんじやつて、それで始終むしやくしやしているのです。だから、この頃は写真師にでもなるうかと考えていますからつて断つたの。無理じやあないでしょ。」

と言いたした。その裏に、美妙にひかれるもののある事をさとられまいとして、雄弁だった。

「色は白いけれど変なのよ、猫背ねこぜなのよ、桜津あざなつていうので、うちの女中なんか殿様ごぜんだの御前ごぜんだのつてほど、華族の若様あだなぜんとしているのよ。桜津さんみちゆうじょう三位中將あだなつて渾名あだななの。」

「それはあなたが附けたのでしょ。」

と孝子もおかしいけれど叱るようにいった。

「嘘よ、お正月の歌がるたをした時、負けたんで額に墨で黛を描かれたからよ。」

いたずらっぽくはいつたが、その男は漢学の造詣も深く、書家でもあった。錦子が、北斎ほくさいの描いたという楊貴妃ようきひの幅ふくが気に入って、父にねだって手に入れた時、それにあう文字を額にほし  
 位いと思つて、『文選もんぜん』や『卓氏藻林たくしそうりん』や、『白氏文集はくしもんじゅう』から経卷ひきずまで引摺りだして見たが、気に入つた句が拾いだせない  
 ので、疖かんしやく癩いをおこし、取りちらかした書籍しよもつを、手あたり次第に引つつかんで投りだしたとき、ふとした動機で桜津が思いち  
 がいをしたのだつた。

「あたしね、怒りっぽくなったり飽あきっぽくなったりするって言つ

たでしよ。その時も、欠伸あくびしながら写真帳を枕にして、だらしなく寝ころんでいたの。そしてね、おつ放り出ぽした本を引きよせて見ると、大好きな長恨歌ちようごんかの、夕殿螢飛思悄然という句が、すぐあつたじゃないの。だから、それ書いて頂戴ちようだいって、桜津に頼んだの。それをね、すっかり思いちがいでしてしまったのよ。」

と、錦子は桜津という男が、何をたのんでも、はつきりしない男だから、一ヶ月もたたなければ書いて来まいと思つていたらば、すぐに書いて来て、嬉しそうにニタニタしながら、不出来ですがといったのは好いが、こんな珍本を見つけましたからつて、おいでいった和本のなかへ、艶書えんしょを入れて来たりして、それからは一日に二度も来るようになったのだと、困つたというふうに話し

た。

孝子は、錦子が、随分変つたなあと、しげしげと見詰めていた。自分でも手紙に、我儘わがままになつたと書いてはよこしたが、東京へ出してもらいたいために、親たちに厭いやがられるようにしたのではないかとさえ思った。小説が書けないということと、恋心というものあくが、そんなに悪どい苦しみだとは、孝子には察しもつかかなかつたが、桜津が自分への思慕しほだと、思いちがいをした、長恨歌の夕殿螢飛思悄然という句を選びだしたということには、そんなものかなあという、仄ほのかな、ほんのりとした、くゆりを、思いしみないでもなかつた。

「だけど、あなた、山田さんと結婚する？」

「そんなこと、考えてもいないわ。」

そうはいつでも、錦子は悩ましげだった。

「小説書いて、独立出来る？」

「だから、あたし、医学終業という題のは、そう思つて出京した娘が、女義太夫になつてしまうことに書いて見たの。」

ふと、二人の眼のなかには、桜の花と呼ばれた娘義太夫の竹たけも

本綾とあやのすけ之助けや、藤の花の越子こしこや、桃の花の小土佐こどさが乗っている人

力車の、車輪どろよや泥除けどろよに取りついたり、後あと押おしをしたりして、懸か

持けちの席亭せきから席亭せきへと、御神輿おみこしのように、人力車を担かついでゆく

ようにする、鼻ひい尻きの書生たちが、席へ陣取ると、前にいつている

仲間と一緒になつて、下足げそく札ふだで煙草盆たたを叩たたいて、三味線にあわ

せて調子をとり、綾之助なら綾之助が、さわりのところで首を振ると、ドウスルドウスルと叫ぶという、女芸人たちの、ばからしいほどの、素晴らしい人気を思いうかべてもいた。

「でも、あたし、どうしても、やって見るつもりなの。」

錦子は自分の胸に、たしかめるように、噛みしめるように言っているのが、孝子には悲しくきかれた。

「女がなんかしていこうつての、きつと、厭なことも多いでしょうよ。どんな厭なことでも、忍耐がまん出来る？」

「どんなことだって、堪えるわ。」

その時、そうは言いきった錦子だったけれど、美妙齋との交渉が深まってくると、堪えきれないことが沢山あった。



おとなしい錦子が、書くものや、上つ面つらだけではあろうが、なんとなく莫蓮ぼくれんになつて来た。美妙齋の影響だと、孝子は思わな  
いではいられなかつた。

「あたしの写真をね、どうしてそんな場所ところへもつてらつしやつた  
のか、芸妓げいしやが拾つてね、あてつけだつて怒つたの。お嬢さんへ  
つて宛名あてなで、随分しどいこと書いてよこしたのですつて。あたし  
それ見せてもらつて、小説のなかへ入れるわ。」  
とも錦子はいつたりした。こんど来て見ると、美妙齋が、改進新  
聞社の勤めもやめてしまい、金港堂の『都の花』も廃刊になり、  
家の中が苦しそうだともいつた。

改良半紙へ罫けいを引いた下敷を入れて、いなぶねと署名したまま  
題も置かず、一行も書けない白紙へむかつて、錦子は呻うな吟つてい  
る日がつづいた。

墨を摺すつて、細筆を幾たび濡ぬらしても、筆さきも硯すずりの岡も、乾かわ  
いて、墨がピカピカ光つてしまっただけだった。

錦子は、そんな、ムシヤクシヤしたあとで、そんなにまで書け  
ない自分を嘆きに、美妙齋の書齋を訪ずれると、今夜も留守、今  
夜も留守という日がつづいた。

錦子は、肩懸けでも編んで、気持ちをまぎらそうとしたが、毛  
糸を編む手許になんぞ心は集中されななかつた。ウーとう  
なると、グイと糸をひっぱって、編棒で突きさしたりして、丸い

毛糸の玉を、むしやくしやに捻<sup>ねじ</sup>りあげてしまった。

「おそろしくヒステリーになつてるね。」

と、そんなあとで逢うと、美妙はハグラかすように言う。

「随分お留守ですのね。」

「ええね。」

美妙はしやあしやあと答えて、

「別荘行きも、もうお止<sup>や</sup>めさ。」

と、うふ、うふと胸のなかで、自分だけで笑つて、別荘なんぞ、何処にあるのかと聞くと、

「それは言えんさ、それにもう、すでに過去のことだ。」

いきなり、錦子の両の頬のえくぼを、両方の人差指で、はさむ

ようにキュツと押して、

「怒ってるの。」

と顔をもつていった。

その手を払って、錦子は顔を反した。細った横顔にも、弾力のない頬ほおの肉にも、懊惱おうのうのかけはにじみ出ているのだが、美妙は、手のうらをかえすように別のことを冷たく言った。

「此処ここの家も、もう越すんだ。」

錦子はそれをきくと、拗すねてなんぞいられなくなって、すぐその話の筋へ引きこまれていった。

「君は何故なぜっていうのですか。何故なぜってね。僕は、このごろ四面楚歌そかさ。貧乏になったのも知ってるでしょう。何にも目ぼしい作

書いてないものね。そりやあ、演劇改良会をつくろうと思って、脚本なんぞ書いたりしてはいるがね、白い眼を剥むいてる奴があるから——落目さ。そりやあ、僕だつて、このままでないという事は、自信はあるけれども。」

「どうしても、このお家を、お離うちれにならなければ、いけませんの。」

不自由なく育つた錦子には、住居すまいを売つて立退たちくということは、没落ということを、眼で見ることだと思つた。

「あたしが、いけなかつたのでしょうか。」

と、自分の責せめのようにな、家のなかを見廻した。小説修業の女弟子などが出はいりするのが、美妙が軽薄才子のように罵ののられる種たねな

のではないかと案じた。

「そんなことは、どうでもいいさ。この辺はね、金満家の住居や、別荘には——別荘って、妾しよたく宅たくだよ。」

とニヤリとして、

「閑静で、便利でもって来いの土地さ。景色は好いし、われわれふぜいのボロ家は、だんだんなくなるさ。」

だから、今日は書斎の整理をすこし手伝ってもらおうかといった。

「ここのお室へや、なつかしくって——」

錦子が湿っぽくなるのを、

「君がはじめて来てくれたのは、二十四年だったかね。そうそう、

君をおくつた帰途かえりに、巡査とがに咎められたことがあつたつけなあ。」

「あら、そんなことなんか、なかつたわ。」

錦子は思い出にカツカする頬をおさえた。

「あるよ、山下町だったかでも査公とがに一ぺん咎められたし、たしかこの家の門前でも咎められたよ。咄はなさなかつたかねえ、自分の家へ、盗ぬす人つとにはいる奴もないじゃないか。」

フツと、莨タバコの煙を、錦子に吹きかけたが

「ハア？ 違つたかな。すると、あれは静嬢しずだったかな。そうだ、思い出した、前の日に伯母おばさんにぶたれたと言つたつけ。」

こともなげに言いはしたが、錦子の血がサツと逆流するのを意地わるくはかるように、

「なにを妙な顔をしてんのさ。そんな女、今ごろいるもんかね。みんな追っぱらっちゃった。」

バタバタそこらの書籍を引っぱり出して抛り出しながら、

「あ、こんないたずら書きがしてある。見たまえ。」

眼をよせて考えこんでしまっている錦子の手をグイと引っぱって差しつけたのは、

労役を恥ぬを妻とする。芸妓前髪を気にする。と二行にならべて書いてある美妙の落書したものだつた。

間もなく、小石川久堅町こいしかわひさかたまちに越すと、美妙が浅草公園の女を

騙だましたという風説がやかましくなった。長い間だましていて、二千円からの金を奪ったというような悪評がたったのだつた。



赤い紙の、四頁だった『万朝報』は大変売れる新聞だった。その記事にそうしたことが載っていたのを、美妙が反駁はんぱくした。

妖艶ようえんの巢窟そうくつの浅草公園で、ことに腕前すでじの凄すごいといわれたおとめのことは、種にしようと思つたから近づいたのだ。三五年さんごの研究で、人事千百がわかつたから、久し振りで書こうとおもつていたところだ。そこへ新聞記事になつて紹介されたのは、好い前触れ太鼓だから、責めもしない、怒りもしない。丁度よいから早速そのままを昨日きのうから書出した。

というのだった。それを文士モラル問題として、手厳しく、というより致命的にやつつけたのが、『早稲田文学』わせだだった。

「裸蝴蝶」の問題の時には、

——これより先、裸美の画坊間の絵草紙屋に一ツさがり、遂に沢山さがる。道德家慨なげき、美術家呆あきれ、兵士喜んで買ひ、書生ソツと買しかう。而してその由来を『国民の友』の初刷に帰する者あり。吾人ごじんかつてゾラの仏国に出でたるを仏国の腐敗に帰せしものあるを聞けり。由来すると説くものを聞かず——

と「小羊漫言こひつじ」に『早稲田文学』の総帥坪内逍遙は書いたが、おとめ問題での美妙の反駁文には手厳しかった。「小説家は実験を名として不義を行かうの権利ありや」という表題で仮借かしゃくなくやつた。

かなり誤っている記事であろうが、それを明らかに正誤もしないで、恬然てんぜん、また冷然、否むしろ揚々として自得の色あるはど

うか、文壇に著名なる氏が、一身に負える醜名は、小説壇全体の醜声悪名とならざるを期せざるなりと責め、——いわゆる実験とは如何、不義醜徳を觀察するの謂か、みずからこれを行うの謂か、もし後者なりとせば、窃盗せつとうの内秘を描かんとするときは、まず窃盗かんぶたり、姦婦かんぶの心術を写さんとするときは、みずからまず姦通を試みざるべからず——

と、悪虐を描くためには、悪虐し、殺人にはみずから殺人するか、そんな世間せけんほう法な賊は、文壇にどんな功いさぎがあるうとも齡よわいするを屑よしとしない。特にそんな奴には警察が嚴重にしてくれ。だが科学者のいう所の觀察であろうと信じている。アジソンの「スペクタートル」における觀察者の義であろうと思う。ならば、觀察者

は清浄無垢むくの傍觀者であり、潔白けつぱく雪の如くなるべきやと、堂々とやった。

美妙も思いがけなかったであろうが、錦子は泣くに泣けない激しい失望だった。

浅草公園の売茶の店は、仁王門のわきの、くめ糸の平内へいないの前に、弁天山へ寄つて、昔の十二軒の名で、たった二軒しか残つていなかった。

観音堂裏には、江崎写真館の前側に、二、三軒あつた。あとは池の廻りや花屋敷の近所に、かたぎ堅気な茶店で吹きさらしの店さききしやうぎに、今戸焼の猫の火入れをおいて、しやうぎ牀几を出していた。

銘酒屋は、十九年の裏田圃たんぼ（六区）が、赤い仕着しきせの懲役人を使  
用して埋め立てられてから出来た、新商売だった。

石井とめという女は、売茶女だとも、銘酒屋女だともいうが、  
ともかく美妙は、おとめを二百円の身みの代しろぎん金をだして、月三十  
円かの手当をやり、物見遊山ものみゆざんにも連れ廻り、着ものもかつてあて  
がった——後のことは分らないが、はじめの支出を書いた日記を、  
錦子に開いて見せて、

「僕が、こんなことで厭になったのなら仕方がないが、君だけは、  
小説家としての僕を、知ってくれるはずだが——」  
と、怨うらみつぽくさえいうのだった。

他人が見捨るなら、あたしは——という、不思議な反抗心が、

一度は美妙に失望した錦子に、美妙を救おうという気を起させた。そして、そう思ったことが錦子にとつて、今までにない楽しさをもつて来た。天涯孤立となった美妙は、錦子を、いなぶね女史として無二の話相手にしだした。錦子にとつては嬉しいことばかりだった。愛されるばかりでなく、急に一人の文学者として、美妙に遇されるようになったのだから——

人の噂うわさも七十五日、あれまでにやられると美妙斎も復活しだした。稲舟も『文芸倶楽部』が博文館から発行されると、前に書いてあった「医学終業」を出して、目をつけられるようになった。「白ばら」は最初はじめの閨けいしゆう秀作家号のに載るし、「小町湯」や美妙との合作もつづいて発表された。

稲舟の作品は、美妙を離れないともいわれた。美妙に、令嬢か質たぎを捨てろともいわれたためか、お転婆てんばな、悪達者わるだつしやだともいわれ、莫蓮女ばくれんおんなのようにさえ評判された。美妙との関係がそうさせたのでもあるし、そんな、ゴシップ的ばかりでなしに、女流作家のなかでの人気ものにした。

二人の結婚は、誰が見ても、するのが当然のようになっていながら、おそろしく気にされていたが、錦子はその相談に郷国くにへ帰ると、すぐあとから美妙齋が追っかけて行って、近くの旅館に宿をとって、嫁にもらって行きたいと切り出した。

美妙齋は居催促いざいそくでせがむし、錦子はなんでもやってくれという。めんくらった親たちや祖母は、やっと、一家が帰依きえしている

学識のある僧侶そうりよに相談して、町の人がその問題に興味をもちはじめたのを防いだ、相続人だから千円のお金を附けたということを、町では噂うわさした。

新婚の夫妻となつて、作さくなみ並温泉から帰つて来たのは二十八年の暮も、大晦日おおみそかの三、四日前だった。

それと、前か後かわからないが、箆筒たんす二十円、ボンネット七十円、夜具ふとん八十円何がいくらと、八十銭のあしだまで書きならべて、新聞紙であまり書きたてるから、披露しないわけにはゆかない、これだけの品代金を、金で送ってくれと、錦子は生家に四百何十円かをせびつた。

来客には派手な社会の者もあり、見られても恥かしくないよう



にしたい。今は離れの一室に籠こもっているが笑われたくないとか、山田家で立たてかえるとしても、悠ゆう暢ちように遊ばせている金ではないとか、披露の式は都下の新聞紙にも掲載されるだろうから、その費用の領収証は取り揃えてお目にかけるといふような下書きは、美妙が書いて渡した。

華やかな嵐あらしを捲まき起おこしたこの新夫婦、稲舟美妙の結合は、合作小説「峰の残月」をお土産みやげにして喝かつ采さいされた。

しかしまた、別種の暴風雨あらしが、早くも家のなかに孕はらみだしていたのだ。

世間的に美妙が蟄ちっ伏ぷくしていた時には、心ならずも彼女たちも矛ほこを伏せていた、おかあさんとおばあさんは、美妙の復活を見る

と、あの輝かしかつた天才息子を、大切な孫を、嫁よめ女じよが奪つてしまつて、しかも、肩をならべて文学者面づらをするのが気にいらない。

「僕を可愛がつているんだから——」

と、美妙はとりなすが、美妙が大祖たいそと称するところの、八十五歳の養祖母おます婆あさんは、木乃伊ミイラのごとき体から三途さんずの川の脱衣おば婆あさんのような眼を光らせて、姑しゅうとめおよしお婆あさんの頭越あしに錦子にらを睨にらめつけた。

美妙の父吉雄が、およしの妹とずっと同棲どうせきしていて、帰らないというのも、この大祖お婆あさんがいるからだということを、錦子は嫌きらというほど悟さとらせられた。

だが、そうした女傑が、二人も鎮座することは、錦子も承知の上だった。その覚悟はしていたのだが、耐えられないのは、日本橋に出ている芸妓に、美妙の子供が出来かけている——ということだ。狭い家庭内で、三人の女に泥渦どろうずを捏ねこかえさせないではおかなかつたのだ。

錦子は半狂乱のようになつた。そんな時期だったのだろう。錦子は墨田川へ身を投げようとした。——墨田川！ それは、ふうちやんが水をみつめていた、あの橋の上流だ。

結婚してたつた四月、お金を無心にやられたのだともいうし、離縁されて帰されたのだともいい、体の悪いのを案じて出京した母親が、連れもどつたのだともいわれているが、そのうちのどれ

にしても帰りにくかった古里ふるさとへ、錦子は帰らなければならなかつたのだが、故郷にも待つてゐる冷たい眼は、傷心の人を撫なでてはくれない。

憂鬱ゆううつの半年、身をひきむしつてしまいたいような日々を、人形を抱いて見たり投ほうりだしたり、小説を書けば、「五大堂」のように、没身みなげ心中を思つたりして、錦子はだんだんに勞つかれていつた。事あれかしの世間は、我儘娘の末路、自由結婚、恋愛ざんまい三昧ざんまいの破綻はたんを呵か責しやくなく責めて、美妙に捨すてられた稲舟は、美妙を呪のろつて小説「悪魔」を書いてゐると毒舌どくぜつを弄ろうした。

錦子は、そうまでされても美妙をかばつた。そんなものは書いていないということ、紅葉の文芸欄といつてもよい、『読売新

聞』によつて、「月にうたう懺悔のざんげ一節ひとふし」を發表してもらつたが、自分が悪かつたということばかりいつている、しどろもどろの長歌みたいなものだつた。

恋とはそうしたものか、そんな中でも、美妙へは消息していた。手紙では人目が煩うるさいので、書籍の行間に、切ない思いを書き入れては送つた。

秋の早いみちのくに、九月の風がサツと吹きおろすと、ホロホロツと白露しらつゆは乱れ散つた。それを見ていた錦子の、張り切つていた気持ちに崩くずれが来て、白い粉の薬を飲んだのが廿三の彼女の一期いちごの終りだつた。花をさして、机の上に一本の線香をくゆらし

て――

私は、今日耳にしたのだが、その時、錦子を絶息から甦よみがえらせて、四、五日保たせたのは、錦子の許いいなずけ婚の人で、それから、その医師は、はやったということだ。

この、明治二十九年には稲舟をさきに、一葉も散り、若松賤子も死んでいる。生前、さほどいじめなくてもよかつた稲舟への同情は、再び美妙へのモラル問題となつた。それは直ただちに、日本橋の妓ぎを正妻にしたからかも知れない。

今は、七十を越して、比丘尼びくにのように剃ていはつ髪している石井とめ女を、途中で見かけたという便りを叔父おじからもらったが、この章を終るまでに探たずね出せなかつたので、錦子との交錯は不明だ。







# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「春帯記」岡倉書房

1937（昭和12）年10月発行

初出：「東京朝日新聞」

1937（昭和12）年3月27日～4月21日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 田沢稲船

## 長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>